

梵文『十地經』の偈頌について ——特に韻律の問題を中心に——

岩 松 浅 夫

1. はじめに 周知のように、漢訳やティベツト訳の言わば大本の『華嚴經』には、そのままの形ではサンスクリットのテキストは存せず、僅かにその一部の「十地品」と「入法界品」の2章分がそれぞれ独立した經として伝えられているのみである。ところで、その梵本の「十地品」(『十地經』, *Daśabhūmika-/bhūmiśvara-sūtra*)¹⁾には、他の多くの經典類と同様に多数の偈頌が含まれている。近時、筆者はそれら梵本の特に大乘經典の偈頌に興味を抱き、少しく調べているが、ここでは該『十地經』のそれについて気付いたことの中から、特に韻律に関することについて一二述べてみることにしたい。

2. 偈頌の概要 さて、先ずその梵本の『十地經』の偈頌の在り様に関して言えば、本經自体はそのように表題(品=章[parivarta]名)などによって明確に分けられているわけではないが、内容的には通常の經典と同様に言わば本論部分の前後に「序品」(nidānaparivarta)と「囑累品」(parindanāparivarta)を具えた三部形式になっていると見ることができ、その中、最初の「序品」と最後の「囑累品」では長行(散文)と偈頌が交互に何度か繰返され、本論部分では先ず偈頌による「序」(導入部)に続いて各「地」の内容等が長行で説明され、次いで再び偈頌によってそれが要約・再説される、という形式になっているということになる²⁾。なお少しく付言すれば、同じ本論でも最初の「初地」と最後の「第十地」はそれぞれやや異なって、前者には序に当る「勸説偈」³⁾が、また後者には長行を要約・再説した「重説偈」³⁾が共になく、また前の「地」の「重説偈」と次の「地」の「勸説偈」の間は、前者の終りを告げる(散文の)1文を別にすれば⁴⁾区切り等はなく、つまり2つの偈群は殆ど連続する形で続いている、ということである。

3. 韻律とその偈数 次に、本經の偈頌で用いられている韻律(metre)について言えば、十数種に上るさまざまなものがあり、中には古典サンスクリットの通常の詩では見られないようなものや⁵⁾、或いは比定が不能若しくは困難な、つまりかなり特異で特殊なものも含まれているということになる。それはともかく、

(164)

梵文『十地經』の偈頌について (岩 松)

以下に冒頭の帰敬偈も含めた各章(「品」又は「地」)毎にその中に所収の偈の韻律とそれによる偈数を掲げれば、次の如くということになろう⁶⁾。

00. (= dedication): śārdūlavikrīḍita (1 v.)

0. 1. ① śloka (6 vv.)

② rathoddhatā (5 vv.; v. 9: unidentifiable [c, d = śālinī ?])

2. ① upagīti (1 v.)

② āryā (4 vv.; v. 2: K = upagīti)

3. ① gīti (1 v.; d: irreg.)

② āryā (1 v.)

③ śloka (3 vv.; cadence: irreg. [all 3: v. 3cd = viparīta ?])

④ unidentifiable (1 v.)

⑤ śloka (1 v.)

4. ① triṣṭubh-jagatī (10 vv.; 1 v. = upajāti (1), 3 vv. = upajāti (2); 2d: irreg.)

I. 1. omitted

2. ① vasantatilakā (23 vv.)

② śloka (1 v.)

II. 1. ① śloka (5 vv.; 2b, 4b [both RS only]: irreg.)

2. ① vasantatilakā (14 vv.)

② śloka (1 v.)

III. 1. ① rathoddhatā (5 vv.; v. 1a: irreg.)

② śloka (1 v.)

2. ① vasantatilakā (17 vv.)

② śloka (1 v.)

IV. 1. ① utthāpanī/pramitākṣarā⁷⁾ (5 vv.; 3 vv. = utthāpanī)

② śloka (1 v.)

2. ① vasantatilakā (16 vv.)

② śloka (1 v.)

V. 1. ① mālinī (3 vv.)

② utthāpanī/pramitākṣarā (RS, K = pramitākṣarā. 5 vv.; 2 vv. = pramitākṣarā)

③ śloka (1 v. [+1]⁸⁾; b: irreg.)

2. ① vasantatilakā (21 vv.)

② śloka (1 v.)

- VI. 1. ① mālinī (8 vv.)
 ② svāgatā (1 v.)
 ③ śloka (1 v.; a [cadence]: irreg. [K = reg.])
 2. ① vasantatilakā (19 ½⁹⁾ vv. [K = 21 vv.]
 ② śloka (1 v.)
- VII. 1. ① āryā (10 vv.; v. 5: upagīti, v. 7: gīti)
 ② śloka (2 vv.)
 2. ① vasantatilakā (20 vv.)
 ② śloka (1 v.)
- VIII. 1. ① unknown (= (r n b h y)¹⁰⁾, cf. candravartman = rnbhs. 10 vv.; 3a: irreg., 6a: supplied with Tibetan [K = lacking])
 ② śloka (2 vv.)
 2. ① vasantatilakā (21 vv.)
 ② śloka (1 v.)
- IX. 1. ① śloka (6 vv.; 1a: irreg.)
 ② maṇiguṇanikara (or śaśikalā ?¹¹⁾. 3 vv.; v. 9: mixture of maṇiguṇanikara and (r j r j s), and 7d, 8a: irreg.)
 ③ unknown (= (r j r j s), cf. tūṇaka = rjrjr; RS: '(ra, ja, ra, ja, sa) (Tūṇaka ?),' K: 'ra ja ra ja sa cf. tūṇaka (ra ja ra ja ra).' 3 vv.)
 ④ unidentifiable (1 v. [c, d = śloka ?])
 2. ① vasantatilakā (22 vv.; RS 18c: restored and supplied by Tibetan)
 ② śloka (1 v.)
- X. 1. ① rathoddhatā (13 vv.; RS 8a, 9c: restored and supplied by Tibetan)
 ② śloka (3 vv.; 16d: irreg.)
 2. omitted
- XI. 1. ① mālinī (14 vv.)
 ② śloka (41 vv.)
 2. ① śālinī (RS = sālinī. 1 v.)
 ② triṣṭubh-jagatī (9 vv.; 3 vv. = indravajrā, 5 vv. = upajāti (1))

そしてまた、上の各韻律の型（長短調など）とそれによる偈の総数を示せば、同様に次の如くということになろう。

āryā (12 + 18, 12 + 15 [morae]): 13 (K = 12) vv.

(166) 梵文『十地經』の偈頌について (岩 松)

utthāpanī/pramitākṣarā (×-~--~--~--~×4): 10 vv.

utthāpanī (-~--~--~--~×4): 3 vv.

pramitākṣarā (~--~--~--~--~×4): 2 vv.

upagīti (12+15, 12+15 [morae]): 2 (K=3) vv.

gīti (12+18, 12+18 [morae]): 2 vv.

triṣṭubh-jagatī (×-~--~--~--~×/×-~--~--~--~×4): 19 vv.

indravajrā (-~--~--~--~×4): 3 vv.

upajāti (1) (×-~--~--~--~×4): 6 vv.

upajāti (2) (×-~--~--~--~×4): 4 vv.

maṇiguṇanikara (~~~~~~×4): 3 vv.

mālinī (~~~~~~×4): 25 vv.

rathoddhatā (-~--~--~--~×4): 22 vv.

vasantatilakā (-~--~--~--~×4): 173 ½ (K=175) vv.

śārdūlavikrīḍita (-~--~--~--~×4): 1 v.

śālinī (-~--~--~--~×4): 1 v.

śloka (××××~--~×, ××××~--~×2): 82 [+1] vv.

svāgatā (-~--~--~--~×4): 1 v.

unknown [= (rnbhy)] (-~--~--~--~×4): 10 (K=9) vv.

unknown [= (rjrjs)] (-~--~--~--~×4): 3 vv.

unidentifiable: 3 vv.

S = 370 ½ [+1] (K=371) vv.

4. 未知及び比定不能の韻律について 本經における偈頌の在り様とその韻律, そしてそれらによる偈数等については以上の通りである。さて, 先にも指摘し, また実際に上の表でも 'unknown' (未知) 若しくは 'unidentifiable' (比定不能) の語で示したように, 本經中の偈頌の中には, 韻律の型 (長短調など) は明白でまた明確であるが該当する名前が古典サンスクリットの詩の中には知られないものや, またそれとは別に韻律の型そのものが (詩句によって異なる等して) 確定できないものも幾つか含まれている。そこで, 以下にそれらについて少しく見ておくことにしたい。

先ず, 前者即ち未知 (未比定) の韻律に関しては, (rnbhy) と (rjrjs) という2つを挙げる事ができるであろう。これらは, 実はいずれも古典サンスクリットの詩にはかなり類似した型の韻律が, 具体的には前者には candravartman (韻律

型は, *gaṇa* の形式では *mbhs*), また後者にも *tūṇaka* (同じく, *rjrjr*) というそれが存し, 両者間の相違は, (*rn bhy*) と *candravartman* が第 10 音, また (*rjrjs*) と *tūṇaka* も第 14 音, のそれぞれ長短が異なるだけといった程度のものなのであるが, いずれにしても厳密に解せばそれらは一致せず別のものと見なければならぬために, そう判断し判定した——せざるを得ない——というものである. それはともかく, ここではそれらの例をそれぞれ 1 つだけ掲げておくことにしたい (それぞれの例を(1)(2)の番号で表すことにする. なお, R や RS と K で異読のある場合は注記し, またイタリック体はその前の音節が位置上の長音をなさないことや, [] 内の数字は「地」の番号などを表す).

- (1) ¹*eva śrutva*¹ *caraṇaṃ viduna śreṣṭhaṃ*
devasaṃgha muditā marupatiś ca |
*bodhisattva bahavo jagaddhitaiśi*²
*pūjayanti sugataṃ jinasutāṃśi*³ *ca || [8] 1 ||*
 (1...1) K *taṃ śruṇitva*, 2 K ⁰*ṣi*, 3 K ⁰*tāṃ*.
- (2) *yatra sattva hīnacitta dīnamānanirātāś*
*tatra vidu śrāvākācārī*¹ *deśeti*² *vṛṣabhī |*
yatra sattva tīkṣṇacitta pratyayāna nirātāś
*tatra jñāna pratyayāna darśayanti virajā*³ *|| [9] 10 ||*
 1 K ⁰*cārī*, 2 K ⁰*śenti*, 3 K ⁰*jāḥ*.

次にまた, 韻律の型そのものが比定不能なものについては, 上の表にも示した次の 3 偈がそれに該当するということになろう.

- ① *vajropama*¹ *hṛdayaṃ sthāpayitvā*
*buddhajñāna*² *paramaṃ cādhimucya |*
anātmānaṃ cittabhūmiṃ viditvā
*śakyaṃ śrotaṃ jñānaṃ etat susūkṣmaṃ*³ *|| [0.1] 9 ||*
 1 V ⁰*maṃ*, K ⁰*ma*, 2 V ⁰*naṃ*, 3 ⁰*maṃ*.
- ② *ye tu vimatisaktāḥ*¹ *saṃśayaiś cābhyupetāḥ*² |
*sarvaśo*³ *na hi teṣāṃ*⁴ *prāpsyate*⁵ *śrotraṃ etat || [0.3] 6 ||*
 1 K -*saṃyuktāḥ*, 2 K ⁰*yupagatāḥ*, 3 R *notes* 'MS. de Londres: *sarvaśa*,' 4 K *teṣāṃ* *api*, 5 K ⁰*ti*.
- ③ *etādṛśā ru*¹ *ta-sahasrān bhaṇitva madhurāṃś*
*tadā maru-kanyakā jinaṃ dṛṣtvā tūṣṇīm*² *-bhūtāḥ |*
*parśad viprasanneyam avocat sugatātmajam*³
*aṣṭa*⁴ *māyā bhaṇa ūrdhva-*⁵ *cariṃ saddharma-rājinām*⁶ *|| [9] 13 ||*
 1 K *śru*⁰, 2 K ⁰*ṇīm-*, 3 K -*jā*, 4 K ⁰*ṭha*⁰, 5 VK ⁰*dhvaṃ*, 6 K ⁰*tāṃ*.

これらは, R や RS 及び K ではいずれもそれらの前のものと同じ即ち①は

rathoddhatā, ②は śloka, そして③は先にも述べた言わば未知 (未比定) の (*rjrjs*) の如くされているわけであるが, しかしそのように判定するには両者間のズレはやや大き過ぎ, 例えば②に関しては śloka が 8+8, 8+8 音節で行末の cadence も ~~~= とあるべきところが 7+7, 7+7 音節で ~~~= となっていたり¹²⁾, また①と③についても詩句の一部には rathoddhatā や (*rjrjs*) とは別の韻律を思わせるものも存する等するため¹³⁾, 筆者としてはかく判断する——せざるを得ない——というわけである。

5. その他の問題 この『十地經』に所収の偈頌の特に韻律に関しては, 問題や検討すべき, 若しくはその意義や価値のあることがらは他にも種々存するということになる。その中から, 最後に, ここでは「序品」の第3群の件について触れておくことにしたい。

先の第3節にも示したように, この第3群には計7偈含まれているが, 内訳的には gīti と āryā が各1偈, śloka が4偈, そして直前にも見たように比定不能が1偈ということになる。ところで, 本經の場合には偈頌は同じ韻律のものがある程度纏って (連続して) 説かれるのが原則, と言うか一般的と思われるので, このように1偈毎にと言ってよい程に——特に初めの間は——目まぐるしく変わるのはそれだけでもやや奇異な感じを受けるわけであるが, それ以上に奇妙と言うか理解が難しく思われるのは, それら全7偈の中で韻律上正規の形をしているのは2番目の āryā と最後の第7偈の śloka だけで, それ以外は何らかの形で不規則になっているということである。具体的には, ここでは紙数の都合もあって実際の詩形は示さず言葉だけで説明するしかないが, 最初 (第1偈) の gīti は正規形の 12+18, 12+18 [morae] に対して 12+18, 12+20 [morae] の形になっていて, 即ち最後の第4詩句が2音量分超過しており, また第6偈以外の第3~5の śloka の3偈も cadence がいずれも正規の ~~~= でなくて ~~~= の形になっている, 等々 (第6偈の「比定不能」の点については既述)。

実は, この第3群の偈頌の問題, 特にその上述したような不規則で一見不可解な韻律の件に関しては, これ迄学者によって全く注目されず, 考察や言及等もなされなかったというわけでは必ずしもない。実際, 筆者の知る範囲でも, パーリや仏教梵語の經典の偈頌や特にその韻律の研究で名高い H. Smith が夙にこの偈群の偈頌に着目し, 考察を展開するとともにそれ (韻律の問題) に対する自身の見解も披瀝している¹⁴⁾。しかし, 1つにはこの問題が学界一般にはそれ程知られておらず, 一方またそれとは別に, ここでは紹介はできなかったが彼の下し

た結論には筆者自身は必ずしも賛同し得ず再検討の余地は（多分に!）残されているように思われ、その点からもこれに対しては学界の有為の人士の注意や注目をもっと集めてもよいように考えて、敢て採上げてみたという次第である。

筆者がこの梵本の『十地経』の特に偈頌の部分を見ていて気付いたことは以上で尽きるということでは決してないが、取敢えず問題点の一端は指摘し得たと思われるので、本稿についてはこの辺で擱筆するということにしたい。

1) この梵本は、これまでに3度出版されている。

J. Rahder, *Daśabhūmikasūtra et Bodhisattvabhūmi, Chapitres Vihāra et Bhūmi*, Paris/Louvain 1926（以下、Rと略）。

R. Kondo, *Daśabhūmiśvaro nāma Mahāyānasūtram*, Tokyo 1936, rep. Tokyo 1962（近藤隆晃『梵文大方広仏華嚴経十地品』大乘仏教研揚会，昭和11年，再刊，中山書房，昭和37年〔三刊本もあり〕。以下、Kと略）。

P. L. Vaidya, *Daśabhūmikasūtra*, Buddhist Sanskrit Text No. 6, Darbhanga 1967.

この中、最初のRahder刊本は後述の「序品」以外は偈頌の部分を欠き、その部分は後に出版された。

J. Rahder & S. Susa, "The Gāthās of The Daśabhūmika-sūtra," *The Eastern Buddhist*, vol. V, No. 4 & vol. VI, No. 1, 1931-2（以下、RSと略）。

また、最後のVaidya刊本は最初のRahder刊本（とRahder及び須佐晋龍両者による偈頌の部分）を基にそれをそのまま組替えて（偈頌の部分は巻末に一括して掲げて）出版したというもので、したがって独自の刊本と言い得るようなものではない。

2) 前注1)でも指摘したように、Rahder刊本とVaidya刊本では「序品」を除くそれ以外の偈頌の部分は本文とは別に刊行（若しくは、掲示）されているので、両者の関係については直接に知り得ない。それが分るのはただ近藤刊本においてだけである。

3) 本文部分の偈頌は、前注1)に所掲のRahder及び須佐の論文では'Initial Gāthā'と'Final Gāthā,' またVaidya刊本では'upakramagāthāḥ,' 'upasaṃhāragāthāḥ'の如く言表されているが、本稿では便宜的にこれらをか（「勸説偈」，「重説偈」と）称することにする（因みに、後者の「重説偈」の用語は龍山章真訳註『梵文和訳「十地経」』破塵閣書房，昭和13年〔再刊本もあり〕，のそれに倣ったもの）。

4) 「地」によっては、この文もないことがある（その場合には、偈が連続することになって、両者の境はただ韻律の変化だけによって示されることになる）。

5) ここでは、具体的にはApteの辞書（V.S. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised and Enlarged ed., Poona 1957-9）の巻末に付された「韻律表」（'Appendix A: Sanskrit Prosody, II: A Classified List of Sanskrit Metres'）には不見のもののことを言う。

6) 以下、ローマ数字（大文字）のI～XIは初地～第十地と「嘱累品」，0は「序品」を，またそれ以外の算用数字はそれら（「地」や「品」）の中の偈群の番号（「地」については，1は「勸説偈」，また2は「重説偈」），そして丸囲みの算用数字はその偈群内に

(170)

梵文『十地経』の偈頌について (岩 松)

- おける韻律の種類を順に、それぞれ表すことにする。ここでは、RS (又は R) を言わば底本に、それと K とで異同がある場合には注記し、また韻律の比定は RS と R, K でもそれぞれなされているが、筆者なりのものを掲げることにした。
- 7) この韻律(名)について、RS はただ '[ta, bha, ja, la, ga]' と gaṇa (三つ組音〔又は単音〕) の形で示し、また K も mātrāsamaka の一種と見て 'padākulaka! (mātrāsama! āryā)' とするのみであるが、これの gaṇa の tbhjlg に対して Apte の「韻律表」では 'utthāpani' と 'viśloka' の名が与えられ、一方この韻律は (第 1 音の長音が 2 短音に分裂した形の) pramitākṣarā と混合して用いられる場合が多いため、かく標記することにした。なお、これの前半部の 'utthāpani' の韻律名に関しては、拙稿「梵文(断簡)『諸法無行経』の偈頌の韻律」『印度学仏教学研究』第 52 巻第 2 号、平成 16 年を、また gaṇa のそれぞれの長短の音形については後注 10) を各参照。
- 8) RS では、最後の śloka の前に、同じ śloka によると見られるティベツト語による 1 偈分の偈頌が補われており (K には不見)、この記号はそのことを表す。
- 9) 偈数が (整数でなく) 端数になっているのは、第 27 偈が 2 詩句だけのため。
- 10) ここでは、それ (韻律) の名前が知られないものは已むを得ず gaṇa の形で表すことにした。因みに、それぞれの gaṇa の長短の音形は次の通り。y=---, r=---, t=---, bh=---, j=---, s=---, m=---, n=---, g=, l= (母音を伴った標記形の ya, ra, …についても同じ)。また、この韻律に関しては、RS は 'ra, na, bha, ya (candravartma ?)', また K も 'ra na bha ya, cf. candravartma ra na bha sa' と注記して、candravartman との関係については承知し留意されている (次の第 9 地の 1 の③の '(rj rjs)' に関しても同様)。
- 11) この韻律名について、RS と K は共に 'śasikalā' とするが、Apte の「韻律表」によると同じ nnnns でも休止位置 (yati, caesura) が第 7 音 (の後) の場合は śasikalā (別名もあり)、また同じく第 8 音の場合には maṇiḡuṇanikara になるとあり、一方これの最初の第 7 偈では初めの 3 詩句は第 8 音、また不規則な第 4 詩句も注に従えば同じく第 8 音にあると見得ることになるので、かく判断し判定することにした。因みに、全体の割合でも、6 (7) : 3 で第 8 音の方が (圧倒的に !?) 多いということになる。
- 12) 因みに、Apte の「韻律表」の samavṛtta の 7 音節の uṣṇih の項にもこの②に該当するような韻律形——詩句によって多少異なるが——は掲げられていない。また、ここでは R を基にしたが、K は音節数は 8+8, 9+7 (又は 7+9) でまた cadence は第 1 行が --- で第 2 行は --- と、やや異なっている。しかし不規則で問題があること自体には変りない。
- 13) 例えば、①については、第 3, 4 の 2 詩句は (前者は第 1 音を長音に変えれば、また後者はそのまま) śālini と解し得、また③に関しても、最後の第 4 詩句は明らかに śloka で、同様に第 3 詩句も冒頭の paṛṣad を paṛiṣad の如くすれば同じく śloka と見得るものになっている。
- 14) H. Smith, "Archaic Verses of the Daśabhūmiśvara," *JBRAS*, N.S. 1, 1950, 参照。

〈キーワード〉 梵文『十地経』, 偈頌, 韻律, 不規則形, *Daśabhūmika-lbhūmiśvara-sūtra*
(創価大学教授)